

“人口知能時代の幼児教育について考える”

園長 高杉 洋史

将棋で有名な羽生善治さんが「人工知能の核心」という本を書かれています。エッセイシャル「天使か悪魔か 羽生善治 人工知能を探る」(2016年5月放送)の取材をもとにして書かれたものです。永世名人をも負かすことのある将棋ソフトの全容を知ろうとする好奇心にあふれた内容です。その中で特に印象的な言葉の一つが「美意識」です。

美意識は「恐れ」に裏打ちされているとか、安心や安定に通底するという指摘です。筋の良い手に美しさを感じる。上手に見える手も危険を察知すると不安や違和感を覚える。直感や大局観は人間の強みでもあるが弱みでもある。人工知能と付き合えないといけない私たちに、重要な示唆となる言葉がちりばめられています。

さて、子どもたちは、急速に発達する人工知能が生活の中にとりこまれる世代です。その時に身に付けておかなければならない能力は何だろうかと考えています。スポーツや音楽演奏で、究極まで鍛錬されたプレーの美しさ。試合の勝負どころでの気合(南アフリカを破ったラグビーの試合をイメージして書いています)。このようなことに感動でき、夢中になれる子どもを育てることが私たちの使命かなと考えています。

言葉に関しては特に「詩」は今のとはまだ苦手のようです。書や古美術のような作品に蓄積された「時間」も苦手なようです。「次第に美しくなる思い出」は今のところ人特有なもののようにです。結局、心を込めたいふれあい。心の交流。実力よりちよっと上に挑戦する勇気を与えること。情緒的な安定。このようなことを教育できるのは親と幼稚園の先生だけです。自信を持って子育てしましょう。

